

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02996

研究課題名(和文) 英語学習者によるフォーカス・オン・フォームのメカニズム解明と学習活動の開発研究

研究課題名(英文) Research to explore the mechanisms of focus-on-form and development of learning activities for Japanese college learners of English

研究代表者

名部井 敏代 (Nabei, Toshiyo)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：20368187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「フォーカス・オン・フォーム」を、活動の主体者視点を重視する社会文化理論の枠組みから捉え直し考察を深めてきた。タスク遂行を目的とした学習者間対話でランゲージングが起こる指導モデルは、「テーマ基盤のピア・ライティング活動」を通じて一部可能であったが、その程度には個人差があり、教室内学習者に一様に働きかけるガイドの構築には至らなかった。個人差のある、動的な意識を外部から方向づけする方策の探求という課題が残った。

また、副次的な辞書検索行動の研究では、学習者の検索行動には、対象となる言語と意味理解だけでなく、それまでの辞書使用経験なども影響していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究での結果から、教室内で行われる学習活動と学習の個人差を社会文化理論(活動理論)の視点で考察することの必要性や重要性を示唆された点は学術的にも社会的にも意義があると考えられる。今後の第二言語教育や広く教育研究で、学習者の(認知的および心理的)意識の理解と学習過程・成果の個人差の調査・考察が望まれると考える。

研究成果の概要(英文)： In this study, "Focus on Form" has been considered from the framework of sociocultural theory, which emphasizes the agent's perspective of the activity. An instructional model that aimed at eliciting languaging in learners' dialogue when completing a learning task in theme-based peer writing activities was partially successful in promoting languaging; however, the extent to which individual learners focused on form varied considerably. A further inquiry into possible ways to direct dynamic awareness of individual learners has remained.

Considering that dictionary look-up behavior while reading English is also another form of "Focus-on-Form", I joined a collaborative research with Toshiko Koyama (Osaka Otani University) into dictionary look-up behavior. The findings in this research also indicated that learners' decision-making in word look-up is influenced not only by the language they face but also by their past experience of using dictionaries.

研究分野：第二言語教育, 英語教育学

キーワード：フォーカス・オン・フォーム ランゲージング 協働ライティング learner awareness 活動理論

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得理論では、明示的な言語知識や言語形式へ注意は、言語習得に重要な役割があると考えられているが、一方で、言語運用には言語の形式だけでなく言語の意味や機能の理解や活用も必須であるとされているが、ある程度英語力があるとされる大学生英語学習者でも、それまで学んできた明示的な言語知識(語彙や文法)を目の前の英文読解の過程で有効に利用できていない傾向があった。そこで、言語の三要素のバランスを考慮しつつ言語形式への注意喚起を取り入れた指導法をフォーカス・オン・フォームと呼ぶが、適宜もっとも効果的な方法で言語形式に注意を払う能力、すなわち自律的なフォーカス・オン・フォームの技能は、学習者がぜひ習得すべき技能だと考えられた。これまでの研究では、フォーカス・オン・フォームは研究者もしくは教師が扱うものであったが、本研究では、学習者自身でフォーカス・オン・フォームが自律的に起こる可能性と過程を、ランゲージングなどの枠組みを用いて解明しようと考えた。

2. 研究の目的

大学生英語学習者の自律的なフォーカス・オン・フォームのメカニズムを解明することを目標に、英語学習活動(タスク)遂行中の認知活動に関わるデータを収集・分析して事例研究として理解を深めること、さらにその事例をもとに指導者の介入モデルを考案し、小規模な実験で検証することを目的とした。

3. 研究の方法

大学生英語学習者の自律的なフォーカス・オン・フォームの事例研究を行った。

大学1年生の英語学習者40名を参加者は、ナラティブ・パラグラフ執筆課題を(下書きの執筆、フィードバックを経て、清書の執筆)ペアで行った。参加者は2つのグループに分けられ、それぞれ異なるフィードバック・トリートメントが与えられた。参加者のうち20名は文法的・構造的な問題点を指摘する記号によるフィードバックを受けた。残りの20名は、各グループが執筆した下書きをより洗練させたモデルパラグラフをフィードバックとして受けた。参加者のフォーカス・オン・フォームの分析は、下書き執筆時の言語に向けられた意識、受けたフィードバックに対する意識、そして清書を執筆する時の言語に向けられた意識の、質的データを通して行われた。

学習者の言語学習活動中に発せられた言葉に観察できる言語に向けられた意識(つまり、ランゲージング)が、実際の言語能力向上に結びつくようにする介入モデルの考案にむけ、副次的研究調査として辞書検索行動研究にも参加した。具体的には、TOEICの語彙・文法問題に取り組む学習者2名の辞書検索行動(電子辞書とスマホアプリ無料辞書)を録画し、その録画ビデオを用いた刺激再生法インタビューを通してタスク遂行中の学習者意識とデータとして収集するとともに、検索語彙の1週間後の再認識率を調べて検索行動と語彙学習の関連を調べた。

4. 研究成果

【協働ライティングとフォーカス・オン・フォーム：事例研究】

下書き[第1次アウトプット]+フィードバック分析+修正作業[第2次アウトプット]という経過を経たライティング活動を通じたフォーカス・オン・フォームの事例研究では、(1)学習者が一次的アウトプットでみせるフォーカス・オン・フォームは、語彙選択、構文・文型選択が主であること、(2)受けたフィードバックによって学習者のフォーカス・オン・フォームには差異があり、期待できる学習効果も異なること、(3)受けたフィードバックによって学習者の最終産物は、質的に異なることが明らかになった。

第1次アウトプットでは、学習者は課題であるナラティブ執筆にむけ、情報を収集・分類し、それを日本語から英語に適切に変換することに注意を向ける傾向が高かった。

フィードバックは、本研究では、グループごとに異なるタイプのものが与えられた。一つのグループでは、それぞれの作文のマージンに、文法、語彙選択、パラグラフ展開の要素に関わるエラーをマークで伝えるフィードバックが与えられた。別のグループでは、それぞれの作文をより洗練された作文モデル(リフォーミュレーション)に書き換えたものがフィードバックとして与えられた。与えられたフィードバックの分析は、それぞれ異なるフォーカス・オン・フォームを引き出したと言える。マーク式フィードバックを分析した学習者は、明示的に文法用語などを用いながら、文法問題を解くように自らの作文の問題点を解析した。一方、リフォーミュレーションを受けた学習者は、モデルから文法的、語法的に洗練された用例に着目し議論した。

異なるフィードバックを得、異なる特徴をもったフォーカス・オン・フォームを経験した学習者たちが産出した第2次アウトプットは、フィードバック分析を踏まえたものとなり、先のグループでは修正されるべき文法項目が修正された作文となった。ただし、語彙の選択やパラグラフのロジカルな展開という点では変化が見られなかった。一方、リフォーミュレーションを受けた学習者たちは、文法的間違いがすべて修正されたわけではなかったが、作文の質的要素(例えば、副詞や時制の効果的な使い方)が向上したパラグラフを執筆した。

これらの研究結果は、2019年にFLEAT 7で発表された。

【英語問題回答時の辞書検索行動に関する研究】

副次的研究では、辞書というフォーカス・オン・フォームに有用なツールの使用に関わる学習者の意識を、刺激再生法を用いて集めた学習者の振り返りコメントから分析した。その結果、学習者は単に目の前の語彙の意味がわからないから辞書を引くのではなく、辞書で検索する意義の有無や、実際の検索対象としての語句選択を遂行しているタスクの中で判断していることが明らかになった。さらに、そうした選択や判断には、過去のツール使用経験が影響していることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 吉澤清美 | 4. 巻 26号 |
| 2. 論文標題 Matching EFL learners with appropriate levels of reading materials: Backing for using Extensive Reading Placement/Progress Test | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 関西大学外国語学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 49-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

| |
|---------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Nabei, T. & Yoshizawa, K. |
| 2. 発表標題 The Role of Noticing in Writing-to-Learn Processes |
| 3. 学会等名 FLEAT 7（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|----------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 小山敏子 & 名部井敏代 |
| 2. 発表標題 辞書検索行動の分析3：英語力と辞書検索関係の質的分析 |
| 3. 学会等名 外国語教育メディア学会（LET）第62回（2023年度）全国研究大会（2023年8月8日） |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|-------|---------------------------------------------------|------------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 吉澤 清美 (Yoshizawa Kiyomi) (80210665) | 関西大学・研究推進部・非常勤研究員 (34416) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 小山 敏子 (Koyama Toshiko) | 大阪大谷大学・教育学部・教授 | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |